

16～17世紀におけるハド라마ウトの人びとの移動・移住活動

栗山保之

はじめに

インド洋に面するハド라마ウト *Ḥaḍramawt* 在住の人びとは古来より、イエメン、ヒジャーズ、東アフリカ、インド、東南アジアといった、いわばインド洋海域世界の各地域へ移動・移住活動を展開していた。

アラビア半島の南縁に位置するこのハド라마ウトの人びとの移動・移住活動について、ファン・デン・ブルグ *Van den Berg* は、19世紀にインドネシアへ移住したハド라마ウト出身のアラブ人に関する調査を実施した [Van den Berg]。家島彦一氏は、ハド라마ウトの自然地理や環境、インド洋の海上交通の条件を詳述し、14、15世紀に始まるとされるハド라마ウト系ウラマーのインド洋周縁部にむけての宗教的・文化的活動を紹介され、インド洋海域世界におけるハド라마ウトの人びとの移動に関わる研究の重要性を指摘された [家島1993]。新井和弘氏は、ハド라마ウトと東南アジアとの密接な繋がりに着目し、19世紀後半から20世紀前半におけるハド라마ウト出身者たちのネットワークに関する注目すべき研究をしている [新井]。さらに時代を近現代に限定すると、インド洋におけるハド라마ウトの人びとの諸活動に関する論文集も出版されている [Freitag & Clarence-Smith]。

このように、ハド라마ウトの人びとの移動に関わる研究は近年、活発になりつつあるが、ハド라마ウトの人びとのみならず、人の移動に関わる問題を考える場合、たとえば移動の理由や、その方法・規模・範囲、さらには移動・移住先としての異郷と故郷との関係や、移住者と原住民との政治・社会・宗教的な諸関係の形成とその変容などといった、さまざまな視点からの総合的な分析が必要であると思われる¹⁾。

そこで本稿では、16～17世紀においてハド라마ウトの人びとの移動・移住活動が具体的に如何なる方法で実施されていたのかを検討し、あわせて彼らの移動・移住の理由に関する私見を述べることによって、前近代のインド洋海域における人の移動に関わる問題を考えてみたい。

1) 人の移動に関わる歴史学研究について、より詳細な問題提起は、家島1991: 127; 家島1994aを参照のこと。

なお、検討対象の時期を16～17世紀としたのは、15世紀末にインド洋に現れたポルトガルをはじめとする西ヨーロッパ諸勢力が、武力によるインド洋海域の支配を求めて進出し始めたこの時期において、従来ほとんど顧みられることのなかった、紅海・インド洋西海域においてみられた多様な交流関係の存在とその解明という、筆者の問題関心に関連しているからである。とりわけ17世紀は、オスマン朝の南アラビアからの撤退にともない、北部イエメン山岳・高原地域を支配するにとどまっていたザイド派イマーム勢力が、紅海・インド洋沿岸地域に向けて大規模な軍事活動を展開することによって、南アラビアの情勢が大きく変容した時期にあたる。またザイド派イマーム勢力はさらに、エチオピア王国、サファビー朝、ムガル朝といったインド洋海域世界のさまざまな王朝との外交関係を模索・構築して、インド洋海域世界のネットワークへの直接的な参入を志向していた。インド洋海域が西ヨーロッパ勢力によって掌握されつつあったこの時期において、南アラビアにおけるこのような情勢の変容は、インド洋海域世界に見出される広域的かつ重層的な交流関係に大きな影響を与えたと考えられるのである²⁾。

本稿で主に用いる史料は、ムハンマド・ブン・アブー・バクル・アッシッリー Muḥammad b. Abū Bakr al-Shillī (1090/1682年死亡)によって著された、『アラウィー家の高貴なるサイイドたちの功績における押韻の水場 (*al-Mashra' al-Rawī fī Manāqib al-Sādat al-Kirām Āl Abī 'Alawī*)』(以下、『押韻の水場』と略す)である。主にハドラマウトのタリーム Tarim 出身のサイイドたちの伝をまとめたこの史料は、ハドラマウトをはじめとして南アラビア、インド、東アフリカなどのインド洋海域世界で活動した284名分

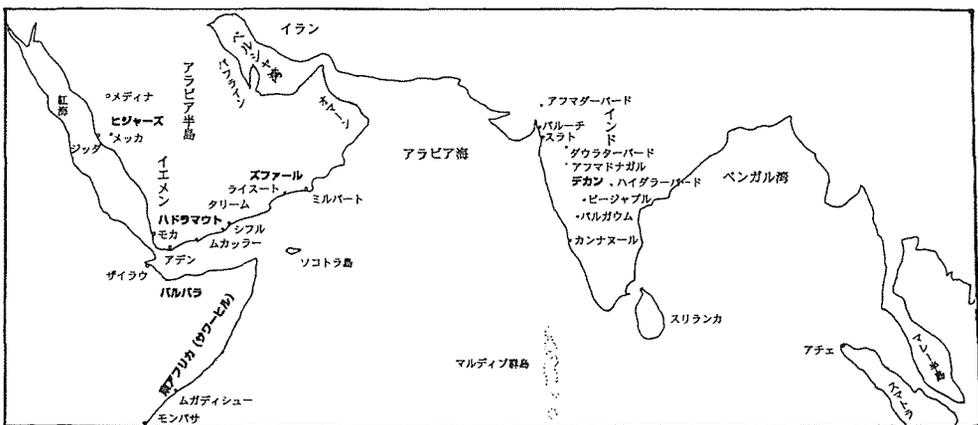


図1 インド洋海域図

2) この南アラビア情勢の変容に関する問題については、17世紀のザイド派イマーム＝ムタワッキル al-Mutawakkil 'alā Allāh Ismā'il b. al-Qāsim (在位1054-87/1644-76年)によって挙行されたハドラマウト遠征を事例として、別稿にて論じる予定である。

の伝が収録されており、ハドラマウトの人びとの移動・移住を検討するうえで、非常に重要な史料であるといえる³⁾。ただし本史料は、著者自身もまたアラウィー家 (Āl 'Alawī, Bā 'Alawī) に属するサイドであるために、その記述内容には彼らの活動について過剰な賛美が付されていることに留意して、利用しなければならない。

I ささまざまな移動・移住先

本章では、『押韻の水場』にみえるハドラマウトの人びとの移動・移住先を検討する。

最初に挙げられる移動・移住先は、メッカ、メディナの両聖地である。巡礼という義務の遂行に加えて、両聖地に寄留する各地域出身の賢人・聖者との邂逅や、彼らのもとの学問修得は、16～17世紀のハドラマウトの人びとにとって最も重要な旅の目的であった。

ハドラマウトの人びとがこの時期に両聖地を盛んに訪れるようになったことを示す事例のひとつとして、17世紀頃にメッカに設けられた、ハドラマウトの著名なサイド家系アラウィー家のハウタ (ḥawṭa banī 'Alawī) が挙げられる⁴⁾。ハウタとは、主にハドラマウトに生成した聖域観念であり、神によって保護された聖なる囲い地を意味していた⁵⁾。メッカでこの時期に観察されるハウタがハドラマウトのそれと同一のものであるか否かは、さらに分析する必要があるものの、17世紀頃にメッカに設けられたハウタの所有者がハドラマウトのアラウィー家であることから判断すると、その機能は類似していたと考えられる。それゆえ、ハドラマウトの聖域観念であるハウタがメッカに移植・形成されたことは、この時期にハドラマウトの人びとが、より多く、より熱心にメッカに赴いていたことを示す証左のひとつであるとみなすことができるだろう。

両聖地に次いで頻出する渡海先はイエメンであった。その理由は、ハドラマウトから両聖地へ向かう場合、イエメンを経由する海路が用いられたからである。かつては、ハドラマウ

3) ただし、掲載されているすべての伝が16～17世紀の人物ではなく、およそ一割弱ほどは16世紀以前の人物の伝である。なお、ムヒッピー al-Muḥibbī は、その著書である紳士録『ヒジュラ暦11世紀の名士に関する事績要覧 (Khulāṣat al-Athar fī A'yān al-Qarn al-Hādī 'Ashar)』にハドラマウトの人びとに関する多くの伝を収録しているものの、それらのいずれもがこの『押韻の水場』からの抄録・引用であることから、本稿では『押韻の水場』のみ用いることとする。

4) メッカにおけるハウタの記事として、『押韻の水場』には、以下の二つの事例がみられる。Abū Bakr b. Ḥusayn b. Muḥammad b. Aḥmad b. Ḥusayn b. al-Shaykh 'Abd Allāh al-'Aydārūs は、「彼はそこ (メッカ) で1068年サファル月9日 / 1657年11月16日に死亡し、マアラー al-Ma'lā にあるアラウィー家のハウタに埋葬された」[MR, II: 26]、また、1085年サファル月6日 / 1674年5月12日にメッカで死亡した Abū Bakr b. Sālim b. Aḥmad b. Shaykhān は、「マアラーにある良く知られたハウタに埋葬された」[MS, II: 26] とある。

5) ハウタの中では殺生は禁じられ、ハウタの所有者の許可なく、ハウタに入り、その中で生産する穀物・果実といった農産物を採ることはできなかった [GB: 357-8, 403-4; MS, II: 124]。ハウタに関する研究は、Serjeant 1962 を参照のこと。

トからメッカまで南アラビアの内陸部を横断する街道や、ハドラマウトからアデン‘Adan、タイズ Ta‘izz、サナア Ṣan‘a’などの諸都市を経由して北上する内陸高原道、あるいはアデン湾・紅海沿いに進む海岸道などの陸路が、海路とともに用いられていた⁶⁾。しかし、16～17世紀において、ハドラマウトの人びとが巡礼に赴く際に、陸上交通路を用いたという記述を、『押韻の水場』から確認することはできない。それは、16～17世紀における南アラビア情勢の変容の影響に起因していると思われる。すなわち、紅海沿岸平原部（ティハーマ Tihāma）、南部イエメン高原地域を支配していたターヒル朝 Ṭāhirids の滅亡（923/1517年）、オスマン朝の南アラビア侵攻（945-1045/1539-1636年）、北部イエメン山岳・高原地域を支配するザイド派イマーム勢力の抵抗と同勢力によるオスマン朝の排除などによって、南アラビアの内陸部は混沌とした状況にあった。このため、16～17世紀に巡礼に向かうハドラマウトの人びとは陸路の利用を忌避し、海路を用いたのである⁷⁾。

海路でイエメンへ渡るハドラマウトの人びとが訪れる港のひとつは、アデン港（Bandar ‘Adan）であった。『押韻の水場』には「イエメンへ旅立ち、アデン港に入港した（raḥala ilā al-yaman wa dakhala bandar ‘adan）」という記述が散見しており [MS, II: 32, 35, 42, 90, 96 など]、ハドラマウトのシフル港（Bandar al-Shiḥr）を出港した船はアデン港に寄港した後、紅海を北行してメッカの外港ジッダ港（Bandar Judda）へと航行した。ただしアデン港は16世紀末以降、イエメンに侵攻していたオスマン朝による港湾運営の失敗により、凋落傾向にあった⁸⁾。そのため、アデン港に代わって隆盛した港が、イエメンの紅海沿岸に位置するモカ港（Bandar al-Mukhā’）であった [MS, II: 102, 103, 128, 132 など]。とりわけ17世紀には、ハドラマウトの人びと以外に、エチオピア王国の外交使節や、巡礼に向かうムガル朝の皇女や中央アジアのオアシス都市カシュガル Kāshghar のスルタンなどが頻繁に寄港しており [TH: 228, 250, 290, 321; YṢ: 177, 183, 184]⁹⁾、16世紀末期以降のモ

6) ハドラマウト～聖地間内陸道は、ザビードを首都として隆盛したズィヤード朝 Ziyādids 時代（203-409/818-1018年）に整備された [TY: 67]。また、内陸高原道および海岸道については MM: 134-6, 147-8, 191-2 を参照。

7) 紅海・インド洋における航海・船に関する問題は、人の移動について考える際に非常に興味深い課題であるが、16～17世紀のハドラマウトあるいは南アラビア関連の諸史料には、たとえば、乗船者 [NS: 319; TSH: 365]、船の名前 [TS: 212; NS: 286, 351]、船旅にまつわる聖者の奇蹟 [GB: 374-5, 417-8; MR, II: 28, 118] などの記述がみえる。

8) 13世紀の南アラビアの地誌『イエメン地方とメッカおよび一部のヒジャーズ地方誌 (Ṣifat Bilād al-Yaman wa Makkat Ba‘ḍ al-Ḥijāz al-musammāt Ta’rikh al-Mustabṣir)』のアヤ・ソフィア所蔵写本 (Aya Sofia Nr. 3080) の余白に見える1005/1597年付のアラビア語の書き込みによれば、16世紀末期のアデンの状況は、インドのマラバルから来航した船が数艘停泊しているだけで、町は荒廃していたという。この書き込みの写しは、Serjeant 1985 を参照のこと。

9) カシュガルのスルタンに関しては、残念ながら、イエメン側の史料においてそれが誰か示されていないもの [YṢ: 177]、このモカに来航したのが1079年ズー・ルカアダ月/1669年4月で

カ港は南アラビアの国際港として機能するようになっていた。

東アフリカ (al-Sawāḥil, Iqlim al-Sawāḥil) へ向かった者については、他の地域と比して、その人数は必ずしも多くない。『押韻の水場』には、ザイラウ Zayla', ムガディシュー Mughadishū, モンバサ Munbasa が確認できる程度であるものの、ハドラマウト関連の諸史料によれば、これらの諸都市には、ハドラマウトの人びとの移住に伴い、彼らの子孫が居住していたことが述べられている [MS, II: 49, 98; TSH: 38, 385]。

さて、ハドラマウトの人びとはインド (al-Hind, al-Diyār al-Hindiya) へも渡った。当時のインドは「高貴な人びと (nujabā') やウラマーや品行方正の人びとでいっぱいである」と記され [MS, II: 86], インド在住の人びとは「より高度な知恵と荘厳なる能力をもつインドの人びと」と高く評されている [MS, II: 131]。さらに、インド各地の都市についても、「美しさ (bahā') と輝きをもつカンナヌール Kannanūr の町」 [MS, II: 17] や、「その（インドの）地においてその町に類するものが作られなかった、ダウラターバード Dawlatābād と呼ばれる町」と形容されている [MS, II: 24]。『押韻の水場』の著者シッリーは、インド以外の地域や都市をこのような修辞を用いて描写しておらず、このことから16～17世紀のハドラマウトの人びとは、インドを物質的・精神的に最も魅力的な移動・移住先とみなしていたと考えられる。

ところでインドへは、グジャラート地方のキャンベイ湾に注ぐタプティ川河口部のスラト港 (Bandar Surat) か、より湾内奥部に位置するバルーチ港 (Bandar Barūj), またはマラバル海岸のカンナヌールから内陸に入り、ビージャブル Bijāfūr, アフマダーバード Aḥmadābād, ダウラターバード Dawlatābād, ハイダラーバード Ḥaydrābād, バルガウム Balqām といったデカン地方 (Iqlim al-Dakan) の諸都市へ向かった [MS, II: 17, 25, 67, 86, 245 など]。その一方で、当時インド亜大陸で最も隆盛していたムガル朝統治下の北インドへ赴く事例は『押韻の水場』に全く見出し得ない。このことをもって直ちに彼らがムガル朝治下の北インドへ向かわなかったと結論付けることはできないものの¹⁰⁾、その人数はデカン地方へ向かったそれと比して、けっして多かったといえないことだけは確かであろう。

インド以東の注目すべき渡海先に、スマトラ島のアチェ港 (Bandar Āshi) が挙げられる。16世紀末から17世紀前半にかけて、アチェを支配していたスルタン・イスカンダル・ムダ (在位 1016-46/1607-36年) は、スマトラ島西岸のティク、サリダ、インドラプラなどの港を掌握して、国王中心の集権体制を確立し、続くイスカンダル・タニ (在位 1046-51/

↙ あることからすると、カシュガル・ハン国 (Kāshghar Khan) (1514-1680年) の支配階層に属する人物の一人ではないかと推測される。

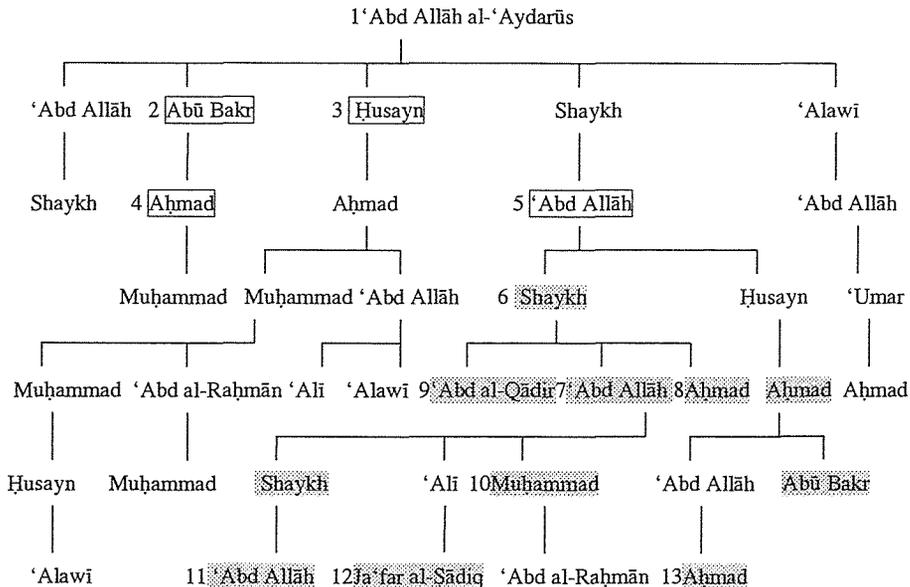
10) ムガル朝の皇帝の庇護を受けた例が一例のみ挙げられるものの、それが北インドでなされたのか否かは、明らかではない [MS, II: 23-4]。

1636-41年)の時代には、アチェは東南アジアのイスラーム諸学の中心として繁栄し、このスルタン・イスカンドル・タニの没後は女王が四代続いたという [鈴木: 105-7]。『押韻の水場』には、まさにこの時期に、アチェを訪れたハドラマウトの聖者が丁重な歓迎を受けたという記事を見出すことができる [MS, I: 172, 174-5]。このように、ハドラマウトの人びとがアチェを訪れる一方で、アチェから南アラビア、ヒジャーズ方面へ向かうムスリムを乗せた船 (barsha) も、同時期のアラビア語史料から確認できることから [TSH: 365, 375], ハドラマウトと東南アジア島嶼部との交流が16~17世紀において、より緊密になりつつあったことがうかがえる。

以上が、『押韻の水場』にみえるハドラマウトの人びとの移動・移住先であるが、では、これらの地域へ向かったハドラマウトの人びとの移動・移住活動の方法とは具体的に如何なるものであったのだろうか。

II 異郷の肉親・親類への移動・移住

ハドラマウトのサイド家系アラウィー家の分家のひとつに、アブド・アッラー 'Abd



囲み文字：アデンへ渡海したアイダールース家の人びと

網掛け文字：インドへ渡海したアイダールース家の人びと

図2 アイダールース家の系図

Allāh b. Abū Bakr b. ‘Abd al-Raḥmān al-Saqqāf 【1】¹¹⁾ (811–65/1408–61年) を始祖とする、アイダルス家 (Āl ‘Aydārūs, Banū ‘Aydārūs, al-‘Aydārūsī) がある¹²⁾。

ハドラマウトのタリームを拠点とした同家が、南アラビア、インド、インドネシアへと徐々に拡がっていったことは、すでに先学によって指摘されているところである [Löfgren: 780–2; 家島 1993: 368–71]。しかし、この家の人びとがどのようにしてインド洋海域世界へ拡散していったのかについては、いまだ十分に検証されていない。それゆえ、同家の人びとの移動・移住の方法を具体的に分析することは、他のハドラマウトの人びとの移動・移住を考察するうえで、参考になるとと思われる。そこで以下では、『押韻の水場』にみえるアイダルス家のイエメンおよびインドへの渡海に関する記事を年代順に抽出し、彼らの移動・移住活動の実相を具体的に検討してみたい。

アイダルス家の海外への移動・移住は15世紀末頃に始まった。イエメンのアデンへ最初に渡ったアイダルス家の人間は、同家始祖の息子アブー・バクル Abū Bakr b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs 【2】 (851–914/1447–1508年) であった¹³⁾。888/1483年にタリームからメッカに旅立ち、イエメン、東アフリカを遍歴した後、889/1484年以降にアデンを拠点とした彼は、当時アデンを統治していたターヒル朝最後のスルタン＝アーミル ‘Āmir b. ‘Abd al-Wahhāb (在位 894–923/1489–1517年) の知己を得て、おおいに信頼されるようになっていた。彼の没後、その墓は参詣の対象となり、スルタン＝アーミルによってさらに壮麗な墓所が建設されたという¹⁴⁾ [QN: f. 187; MS, II: 34–41; TS: 83–6]。アブー・バクルがなぜアデンに定住したのかは明らかではないものの、15世紀後半のアデンが、ラスール朝 Rasūlids (626–858/1228–1454年) 時代に引き続いていまだに多くの外国船が来港し、またターヒル朝による港湾施設の整備などによって [TA, I: 12–3]、おおいに活況を呈していたからであると推察される¹⁵⁾。

11) 本文中のアイダルス家の成員の後に付した番号は、図2の同家の家系図中の番号に対応している。以下、同様。

12) ハドラマウトのサイドはすべてこのアラウィー家に所属し、アラウィー家にはアイダルス家以外に、サッカーフ家 (Āl al-Saqqāf), バーファキーフ家 (Āl BāFaqīh), ハッダード家 (Āl al-Ḥaddād), ハブシー家 (Āl Ḥabshī) などの分家がある [Serjeant 1957; Löfgren]。

13) この人物は、各種の人名録において、サーヒブ・アデン (ṣāhib ‘Adan) と記述され、ルーグレンやサージェントは、このサーヒブを「守護聖者 (Patron Saint)」と解釈しているものの [Serjeant 1957; Löfgren], アデンをどのように守護していたのか具体的なことに関しては何ら説明していない。アイダルス家の成員は、後に述べるように、インドの各都市に定着するが、それぞれ定住した都市のサーヒブと呼ばれていた [MS, II: 23, 24, 130]。しかし、このサーヒブの意味する具体的な事例については今のところ明らかではない。今後の課題としたい。

14) 後にこの墓所には、アイダルスの名を冠したモスクが建設され、それはアデンのクレーター地区に現存する。

15) アイダルス家は後に、バルーチ港、スラト港といったインド西岸の国際港にも拠点を設けるが、同家が港に着目するのは、港が人びとを受け入れる場所で、外来の人間が居留・定住しやすい

さて、こうしてアデンに定着したアブー・バクルを頼って、その兄弟のフサイン Ḥusayn b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs 【3】 (861–917/1457–1511年) や、息子アフマド Aḥmad b. Abū Bakr b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs 【4】 (887–922/1482–1516年)、甥のアブド・アッラー ‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs 【5】 (887–944/1482–1537年) らアイダルス家の人びとが相次いでアデンへと渡り、アブー・バクルのもとを訪れるようになった [MS, II: 52, 96, 134]。

ところが、914/1508年のアブー・バクルの死後、彼のもとに寄留していたフサインとアブド・アッラーはアデンを離れた [MS, II: 96, 134]。またアイダルス家の系図に目を転ずると、同家のアデンへの移動はアブー・バクルの死後、みられなくなっていることがわかる。アイダルス家によるアデンへの移動・移住が実施されなくなった理由は、アデンの情勢の変容に関係していると思われる。つまり16世紀前半以降になると、アデンにおけるたび重なる大火災の発生とそれに伴うアデン在住の大商人たちの家財消失 [FM: 273–4, 308]、大風による停泊中の船舶の損壊・沈没 [FM: 310]、アルブケルケ Alfonso d’Albuquerque 率いるポルトガル勢力のアデン攻撃 [FM: 345–8]、ターヒル朝の崩壊などの諸要因により、アデンをめぐる状況が急変した結果、港湾機能の低下と都市の荒廃が生じた。このため、アイダルス家はアデンへの移動・移住を避けるようになったのである¹⁶⁾。

さてアイダルス家は、イエメンのアデンからインドへと移動・移住先を変えることとなったが、インドに渡った最初の人物は、同家の始祖の曾孫にあたるシャイフ Shaykh b. ‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs 【6】 (919–990/1513–1582年) であった。タリーム生まれのシャイフはイエメンを旅し、938/1531–2年に巡礼を果たして帰郷した。その後二度目の巡礼を挙行し、タリームで13年ほど暮らしていたシャイフは、「958/1551年にインドへ旅立ち、アフマダーバードの大宰相イマード・アルマリク ‘Imād al-Malik の庇護を受けた」という [MS, II: 120; NS: 251]。979/1571–2年にアフマダーバードに、インドにおける拠点としての住居 (bayt) を設けたシャイフのもとには、「都市の民 (khādir) も遊牧の民 (bād) も彼に夢中になり、すべての遊牧の民に属する人びとは彼のもとへ向かい、すべての地域からの学級の徒は彼のもとへ旅した」 [MS, II: 120; NS: 349]¹⁷⁾ とあるように、その周囲には多くの人びとが集まっていた。その後シャイフは990/1582年に、アフマダーバードで死亡し、同地に埋葬された [MS, II: 119–122]。

く、それゆえにさまざまな情報や知識の交流が盛んであったことによると考えられる。歴史の中の港や港町の機能については、家島1994bに詳しい。

16) この時期のアデンの様子やインド洋西海域におけるポルトガルの動向の概要は、Schuman; Serjeant 1963を参照されたい。

17) 引用した史料中のカッコ () は同意語を示し、大カッコ [] は達意の為の筆者による補完を示す。以下同様。

シャイフがいかなる目的でインドへ向かったのかは詳らかではない。しかしインドが、前章にて指摘したように、ハドラマウトの人びとにとって精神的・物質的にも豊かな地とみなされていたことから判断すると、シャイフもまた、豊穡なる生活をインドに求めて旅立ったと考えられる。いずれにせよ、アフマダーバードのシャイフのもとにはその移住後、ハドラマウトのアイダルス家の人びとががつぎつぎと訪れるようになった。

シャイフの息子アブド・アッラー‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh 【7】(945-1019/1538-9年)はそのうちの一人で、彼はシャイフのアフマダーバード移住以前にタリームで生まれた人物であったが、「966/1558-9年に、アフマダーバードにいる彼の父のもとへ旅立った」とあるように [MS, II: 135], 異郷に暮らすシャイフを頼ってインドへ渡海した。アフマダーバードの父のもとに居留し、数年間修学したアブド・アッラーはその後メッカ巡礼へ向かい、再びインドへ戻らずに故郷のタリームへ帰郷した [MS, II: 135-6]。

このように故郷に帰る者がいる一方で、故郷と異郷とを往還する者もみられた。タリーム生まれのアフマド Aḥmad b. Shaykh b. ‘Abd Allāh 【8】(949-1024/1542-1615年)は、兄アブド・アッラー【7】と同様に、「インドの地にいる彼の父のもとへ旅し」[MS, II: 60], 父の庇護のもとアフマダーバードに滞留していたが、タリームへ帰郷して同地在住の同族の娘と結婚した。この結婚後、アフマドは「アフマダーバードに居る彼の父のところへ再度、戻った」という [MS, II: 60]。この二度目のインド行きは971/1563-4年のことであったが、990/1582年にシャイフが死去すると、彼はバルーチ港へと移り住んだ。同地に居を定めたアフマドのもとへは「人びとが、彼の恩寵 (baraka) を求めて、彼のもとへ向かった」とあり、シャイフと同様に、インドの内外から多くの人びとが訪れるようになった。その後、同地で没したアフマドの墓所には、数多くの参詣者たちが訪れたという [MS, II: 60-1]。

こうして、アイダルス家は、アフマダーバードに続いてバルーチ港に、インドに二つ目の拠点を設けることとなったが、インドに移り住んだ同家には当然のことながら、インドで生まれる者も現れるようになった。シャイフの三人目の息子アブド・アルカーディル‘Abd al-Qādir b. Shaykh 【9】(978-1038/1570-1628年)は、「私の母は、インド生まれの母である」としているように [MS, II: 148], 二人の兄がいずれもタリーム生まれであったのに対して、インドで生まれた、アイダルス家最初の人物であった。彼は、有名なハドラマウトの年代記『ヒジュラ暦10世紀の情報に関する旅人の光 (al-Nūr al-Sāfir ‘an Aḥbār al-Qarn al-‘Āshir)』をはじめとして、スーフィズムに関する数多くの著作で知られていたが、1038/1628-9年にアフマダーバードで死亡した [MS, II: 147-152; NS: 334-43]。

さて、アフマダーバードに在住していたシャイフ【6】は、タリームにいる孫ムハンマド Muḥammad al-‘Aydarūs 【10】(970-1031/1562-1622年)に関して、「彼(ムハンマド)の良い評判を聞き、彼(シャイフ)は彼(ムハンマド)をより近くにおきたいと願っていた (istidnā-hu)。それゆえ彼(ムハンマド)はアフマダーバードにいる彼(シャイフ)のもと

へ旅立った」とあり [MS, II: 185], 989/1581年に両者はアフマダーバードで対面を果たした。しかし翌990/1582年にシャイフが急逝し、シャイフのもとにいた父アブド・アッラー【7】も1019/1610年に他界すると、ムハンマドはアフマダーバードを離れてスラト港に移住し、そこを終の棲家と定めた [MS, I: 185-6; NS: 371, 372-9]。後述するように、ムハンマドが定住したスラトはその後、ハドラマウトからインドへ渡る人びとが多数、来航する港のひとつとなった。

ところで、これまでみてきたように、アイダールス家の移動・移住は、親・兄弟など、いわば肉親の範囲内で行われていたが、世代が進んで親族が増えると、同族を頼って異郷へ旅立つ者もみられるようになった。タリム生まれのアブド・アッラー‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh b. Shaykh【11】(1027-1073/1618-1662年)は、「インドのすばらしい禁欲的な生活という果実を集めるために、また彼が希望を成就することを望む人びとから学ぶために、そしてその地にいる彼の父方のおじの一族や彼の祖先を訪ねるために、インドの地へ旅立ち」[MS, II: 178], スラト港に在住していた父方のおじムハンマド【10】のもとを訪ねた。その後、スラト港からビージャブルに移ったアブド・アッラーは、ビージャブル王国のスルタン＝ムハンマド Sulṭān Muḥammad b. Ibrāhīm (在位1035-66/1626-56年)¹⁸⁾のもとに寄留していたが、後にインドからハドラマウトのシフル港に渡り、同地に居住し続けた [MS, II: 177-8]。

また、ジャアファル・アッサーディク Ja‘far al-Ṣādiq b. ‘Alī Zayn al-‘Ābidīn b. ‘Abd Allāh【12】(997-1064/1589-1654年)は「インドにおけるより高度な学問の修得を求めて」、「父方のおじムハンマド【10】に学ぶために、スラト港へ向かった」[MS, II: 86]。スラト港からインドの諸地方を遍歴して数多くの賢人や聖者に学んだ彼は再び、同港に戻ったという [MS, II: 85-7]。

さらに、アフマド Aḥmad b. ‘Abd Allāh b. Aḥmad b. Ḥusayn b. ‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs【13】(生没年不明)も、「彼は、彼のいところ、すなわちそれはジャアファル・アッサーディクであったが、その彼のもとへ最初の旅をした」[MS, II: 67]とあるように、スラト港に居住するジャアファル・アッサーディク【12】のもとに身を寄せた。そしてその後、彼はデカン地方へ向かい、インドの諸地方を巡った後、ハイダラーバードで死亡したと伝えられている [MS, II: 66-7]。

以上が、『押韻の水場』から年代順に抽出した、アイダールス家によるアデン、インドへの移動・移住活動に関する記述である。これらの記述内容をまとめると、アイダールス家の人びとは、故郷から遠く離れた異郷の肉親・親類を頼って渡海し、異郷の血縁者のもとに寄

18) 『押韻の水場』では、このスルタンの名は、マフムード・ブン・イブラーヒーム Maḥmūd b. Ibrāhīm とあるが [MS, II: 178], ムハンマド・ブン・イブラーヒームの転写違いであると思われる [Harby]。

留し、ある者は帰郷し、またある者は故郷と異郷とを往還し、そしてある者は異郷の肉親・親類を足掛かりとしてさらなる新天地を求めて旅立ち、新たな生活の場を異国の地に見出していったとすることができる。またこの移動・移住は、故郷と異郷との間における相互に密接な連携が常時、存在・機能していたからこそ、可能であったことはいうまでもない。

このような親族を頼って実施される移動・移住活動が数多く実施されたことによって、イエメン、東アフリカ、インド、東南アジアなどのインド洋海域の各地へとハドラマウトの人びとが徐々に拡散していったことは、想像に難くないのである。

Ⅲ 異郷の政治的有力者への移動・移住

『押韻の水場』には、紅海・インド洋海域のさまざまな地域をめぐるハドラマウトの人びとを丁重に歓待し、彼らの修学や教育活動をその庇護のもとに支援し、あるいは高職を与えて厚遇するといった政治的な有力者に関する記述を見出すことができる。

たとえば、インド各地を遍歴しカンナヌールへ入ったアブド・アッラー‘Abd Allāh b. Ḥusayn Bā Faqīh に関して、「カンナヌールの支配者であるワジール＝アブド・アルワッハーブ Wazīr ‘Abd al-Wahhāb のもとにおいて彼（アブド・アッラー）のための歓待がなされたが、その当時、彼は若者であり、若さの瑞々しさによって彼の初々しさが満ち溢れていた。そこでワジール＝アブド・アルワッハーブは彼との姻戚関係を望んで、彼の娘と彼を結婚させ、彼に宰相の地位を与え、第一の地位に彼を座らせたのであった」とある [MS, II: 130-1]。

また、スマトラ島のアチェ港へ向かったムハンマド Muḥammad b. Aḥmad b. Abū Bakr b. ‘Abd Allāh al-Shillī (980/1572年生)は、「彼は、その（アチェ港の）地のスルタンと会ったが、その当時スルタンは女性であった。さて彼女は彼に最高の歓待とすばらしい贈り物をし、彼女の宰相たちやアミールたちは彼を賞賛した。また、彼女は彼らの前で彼に富を与えた。そして彼は彼らの保護のもとに暮らした。……（中略）……宰相たちの一人が彼の娘を彼（ムハンマド）に与え、そうして彼は多くの子供をもうけた」 [MS, I: 171-2] とある。このような、丁重な歓待、異郷の有力者の娘との婚姻や、公職への参加といった事例は、『押韻の水場』に数多く散見する¹⁹⁾。

ところで、ハドラマウトの人びとと異郷の有力者との間に見出される、このような関係は、

19) デカン高原のビージャブルを首都としたビージャブル王国の王アーディル・シャー [MS, II: 24-5] やアフマドナガル王国のスルタン＝ブルハーン・ニザーム・シャー（在位 1591-5年） [MS, II: 118-9], イエメン・ターヒル朝スルタン＝アーミル・ブン・ダーウード [MS, II: 34-41] や東アフリカのザイラウの支配者ムハンマド・ブン・アティーク [MS, II: 37] といった異郷の支配者たちが、到来するハドラマウトの人びとを丁重に遇していた。

どのようにしてつくられたのであろうか。換言すれば、ハドラマウトの人びとはどのような方途で、遠く離れた異郷において政治的な有力者のもとを訪れていたのであろうか。

以下では、ハドラマウトの人びとを厚遇した異郷の政治的有力者たちの一人である、インドのマリク・アンバルをとりあげ、この問題を検討してみたい。

マリク・アンバル Malik ‘Ambar (955–1035/1548–1626年)²⁰⁾ は、デカン高原のアフマドナガル王国の大宰相であった。その出身はエチオピアで、奴隷商人によって買い取られた彼はバグダードの奴隷市場において売られていたが、或る商人を介してインドにもたらされた後、アフマドナガル王国の君主ムルタダー・ニザーム・シャー一世 Murtaḍā Nizām Shāh I (在位 972–97/1565–88年) の宰相の一人チャンゲズ・ハーン Sanjis Khān に購入された。チャンゲズ・ハーンの没後、ゴルコンダ Golkonda に移住したが、ムガル朝がアフマドナガルに侵攻したとき、彼はアフマドナガル王国の王族の一人をムルタダー・ニザーム・シャー二世 (在位 1008–19/1600–10年) として擁立し、これに抗した。当時アフマドナガルの北方にはムガル朝が隆盛しており、同朝はその版図拡大を志向して、デカン地方への南下の機会を伺っていた。このため、アフマドナガル王国とムガル朝はたびたび衝突したものの、マリク・アンバルは、ビージャブルを首都とするビージャブル王国のイブラーヒーム・アーディル・シャー二世 Ibrāhīm ‘Ādil Shāh II (在位 987–1035/1579–1626年) の軍事的支援を受けるなどして、アフマドナガル王国の安定に努め、彼が死去するまでムガル朝の侵攻を許さなかったという [Seth; Shyam]。

このような軍事的手腕に優れたマリク・アンバルは一方で、宗教・文化を擁護する人物としても著名であり、そのためインドの各地から彼を訪れ、その保護下において修学・教育に従事する者たちが多数いたことはよく知られている [Seth]。従前の研究では、これらの人びとの中に、ハドラマウトの人びとが存在していたということは、いまだに指摘されていない。しかし『押韻の水場』には、(A) アブー・バクル Abū Bakr b. Ḥusayn (d. 1074/1663–4年) [MS, II: 24–5], (B) アフマド Aḥmad b. Abū Bakr b. Aḥmad (1019–1057/1610–47年) [MS, II: 45–7], (C) ジャアファル・アッサーディク Ja‘far al-Ṣādiq b. ‘Alī Zayn al-‘Ābidīn b. ‘Abd Allāh (997–1064/1589–1654年) [MS, II: 85–7], (D) ザイン Zayn b. ‘Abd Allāh Bā Ḥasan (d. 1058/1648年) [MS, I: 100–1], (E) シャイフ Shaykh b. ‘Abd Allāh b. Shaykh b. ‘Abd Allāh al-‘Aydārūs (993–1041/1585–1632年) [MS, II: 117–9], (F) ウマル ‘Umar b. ‘Abd Allāh Bā Shaybān (d. 1066/1656年) [MS, II: 245] といった人びとが、いずれもマリク・アンバルのもとで丁重に遇されていた

20) アラビア語で叙述された史料では、‘Anbar と表記されているが、インド史では、Ambar と表記されている。私は、このマリク・アンバルは表記こそ異なるが、同一人物であると考えている。すなわち、『押韻の水場』の著者シッリー al-Shillī やムヒッピーは、おそらくアラビア語のミームとヌーンとの音を混同し、そのまま誤って記録したと考えられるからである。

ことが述べられている。たとえば (F) ウマルに関して、「彼は、著名なスルタンで、偉大なワジールであるマリク・アンバルのもとへ向かった。するとマリク・アンバルは敬意と歓迎の意をもって彼を受け入れた。……(中略)……彼は、マリク・アンバルが死亡するまで、彼のもとでアラブの諸学やアダブの諸学を学んだ」とあり [MS, II: 245], ハドラマウトの人びとがマリク・アンバルのもとを訪れ、他の賢人・聖者と同様に、彼のもとで修学・教育に励んでいたことが記されている²¹⁾。

さて、このマリク・アンバルの礼遇に浴した、上記のハドラマウトの人びとが互いにどのような関係にあったのかに着目してみると、彼らは (甲) アブド・アッラフマーン ‘Abd al-Raḥmān al-Saqqāf b. Muḥammad al-‘Aydarūs と、(乙) アブー・バクル Abū Bakr b. ‘Abd al-Raḥmān b. Shihāb と、そして一部は先述の (D) ザインの三名のいずれかに師事することによって、いわば同じ師匠に師事する兄弟弟子の関係にあったことがわかる。この師弟関係を図示すると、図3のようになる。

下図にみえる兄弟弟子の関係にあった彼らの間に、相互交流関係が存在したであろうことは容易に推測され得る。仮に互いに交流関係があったとするならば、インドに在住するマリク・アンバルに関する情報が、彼らの間で伝達・共有されていたと考えることができるだろう。

彼らがマリク・アンバルに関する情報を互いに伝達・共有していたのではないかという推測を裏付ける傍証として、彼らがほぼ同じ時期にマリク・アンバルのもとへ向かっていたことが挙げられる。すなわち、彼らはいずれもスラト港に入港し、すでに同地を拠点としていたアイダルス家のムハンマド・アルアイダルスを訪れていた [MS, II: 25, 86, 100, 118, 245]。ムハンマド・アルアイダルスは 1019/1610 年以降にスラト港へ移住し、同地で 1031/1622 年に死亡しており、またマリク・アンバルは 1035/1626 年に死去しているので、

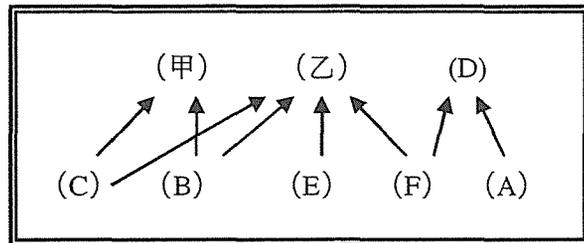


図3 師弟関係図

21) 『押韻の水場』には、「マリク [・アンバル] の居場所はサイドたちやウラマーの集まる場所であり、行ない正しい人びとや教養ある人びとの鋤山 [の如き] であった」とある [MS, II: 25]。

彼らはいずれも 1019/1610 年から 1031/1622 年までの 12 年の間にインドへ渡り、少なくとも 1035/1626 年以前までにマリク・アンバルのもとを訪れていたと推測することができるのである。

つぎに、これらハドラマウトの人びとを受け入れたマリク・アンバルについて検討してみたい。17 世紀のダマスカスの学者ムヒッピー al-Muḥibbī は、その紳士録『ヒジュラ暦 11 世紀の名士に関する事績要覧 (*Khulāṣat al-Athar fī A'yān al-Qarn al-Hādī 'Ashar*)』に、このマリク・アンバルについて、つぎのような注目すべき記事を残している。

彼（マリク・アンバル）は、サイドたちや学究の徒たちに対する善行多く、全ての地域から人びとが彼のもとへ向かっていた。そして彼は、彼らを、とりわけタリームの人びとであるサイドたちを、彼の温かい心で抱擁していた。……（中略）……また彼（マリク・アンバル）は毎年、その年にサイドたち、マシャーーフ、そして貧者たちに用いる、彼らのための金銭や衣類をハドラマウトへ送っていた [MA, III: 231]。

対ムガル朝戦争において優れた軍事的才能を発揮していたマリク・アンバルが、サイドたちやウラマーなどを厚遇し、彼らの学術・宗教的な活動を支援していたことはすでに述べた通りだが、さらにマリク・アンバルがタリームから来訪するサイドたちを特に優遇し、加えてハドラマウト在住のサイドたちやマシャーーフなどの人びとに対して毎年、金品を送付することによって、彼らのための経済的支援を実施していたという記述は、他の史料に見出し得ないきわめて重要な記録である。金銭や衣類といった以外に具体的な支援内容に関わる記述はなされていないものの、マリク・アンバルによってハドラマウトへの定期的な経済支援が送付されていたというこの事実により、インド在住のマリク・アンバルという名の、いまだ知らない異郷の政治的有力者がハドラマウト在住の人びとを厚遇しているという良い評判・うわさが、ハドラマウトの人びとの間において、広く流布していたと考えることは、十分に可能であろう。

以上の検討をまとめると、つぎのようになろう。ハドラマウトの人びとのうち、師を同じくする兄弟弟子の関係にある者たちは、彼らの間で形成されたつながりを通じて、異郷の政治的有力者に関する情報を相互に伝達・入手し、精神・物質的により豊かな生活環境を求めて移動・移住していったのである。さらにまた、このような移動・移住活動をより促進した契機として、ハドラマウトの人びとに対して経済的支援を実施していた異郷の政治的な有力者が存在していたこと、そしてその有力者によって送付された経済的支援と、それに伴って異郷の支援者に関する好意的な評判が彼らの間にひろがったことが考えられ、その結果として、ハドラマウトの人びとは異郷の有力者のもとへ新天地を求めて渡海したと考えることができるであろう。ハドラマウトの人びとの移住・移動活動は、目的地としての異郷における生活の安定・保証に関する情報に基づいて、実施されたのである。

ところで、新天地を希求するハドラマウトの人びとは、こうして移動・移住していったのだが、そもそも彼らは、なぜ彼方の異郷へ旅立ったのであろうか。次章において、その理由

を考察してみたい。

IV 移動・移住理由の真相

ハド라마ウトが古来より海上交通の要衝であったことはよく知られている。それは、ハド라마ウトがアラビア半島の南縁部分に位置し、インド洋西海域を往来する船の多くが、モンスーンに依拠する航海術上の必要ゆえに、このハド라마ウトに所在する港に寄港していたからである。それゆえ、ミルバート *Mirbāṭ*、ライースト *Raysūt*、ムカッラー *al-Mukallā'*、シフルといったハド라마ウトの港は、食糧・水を補給する船や風待ちをする船、あるいは特産品の積み出しや交易品の積み替えをおこなう船でおおいに賑わっていた。

このように、インド洋西海域を航行する上でハド라마ウトが重要な位置にあったからこそ、ハド라마ウトの人びとによる海外への移動・移住が活発におこなわれたのであろうということは想像に難くない。しかし、ハド라마ウトの人びとが海を渡る理由には、より根源的な問題が内在していたと思われる。

現在、ハド라마ウトといえば、それはイエメン共和国の一行政単位としてのハド라마ウト県を示している。しかし歴史的には、インド洋に沿ってその東隣に位置するマフラ *Mahra* や、より東方のズファール *Zufār* (現オマーン領) を包含する広大な領域がハド라마ウトとされた。

この広大な領域は、一部の海岸部を除いて全般的に高温で乾燥した気候であるため、その産業は、ナツメヤシ栽培と山羊・羊・ラクダの飼育を主体とした農耕・畜産業であり、これに加えて伝統的な養蜂業や、海岸部における漁業も営まれているものの、農産物や海産物の生産性は必ずしも高いとはいえない。また、ハド라마ウトの伝統的な特産品として乳香や龍涎香が挙げられるが、ハド라마ウトに居住するすべての人びとがこれらの特産品によって十分に裨益していたとは考え難い。

このような自然環境におかれたハド라마ウトの状況を歴史的に概観してみると、水害・干害・風害・虫害などの自然災害や、これらの災害に起因する飢餓・飢饉、あるいはペスト・胸膜炎などの疫病に、ハド라마ウトがしばしば見舞われていたことがわかる。次頁の表はこれらの災害をまとめたものである。

『シフル史 (*Ta'rikh al-Shiḥr*)』が記す 894/1489 年に生じた災害は、つぎのようにある。

その年に、神はイクリールの星 (5月24日～6月5日) に、大洪水を伴った雨をお降らしになり、その大洪水はハミーラ *Khamīla* から流出し、アイン *'Ayn*、アムド *'Amd*、ダウアン *Daw'an*、サル *Sar*、イディム *'Idim*、スィービ *Thiib*、そしてそのほかのワーディーから流れてきた洪水とともに、[ハミーラを] 貫通した。そしてその大洪水は、多くの家畜や脱穀場の穀物、そして人びとや多くのナツメヤシの樹木を呑み込んで、堰 (*maḍāli*) を引っ繰り返し、カサム *Qasam* [村] やズバイディー家 (*Āl al-Zubaydī*)

表1 ハド라마ウトにおける自然災害・飢饉・疫病

A. H/A. D	自然災害・飢饉・疫病	典拠
587/ 1191	ハド라마ウトで熱波が生じ、死者がでた。	TS: 55
613/ 1216	ハド라마ウトで胸膜炎 (dhāt al-janb) が蔓延し、死者多数。	TS: 76
647/ 1249	洪水の発生。	TS: 93
654/ 1256	大雨による大洪水が発生し、家屋・農地・家畜を襲う。	TS: 95
658/ 1260	大雨によって溢れた溜め池の水が家屋を破壊。	TS: 97
667/ 1268-9	ハド라마ウトで穀物が焼失する。	TS: 100
685/ 1286	豪雨・暴風・洪水がズファールを襲い、死者多数。	TS: 105
698/ 1298-9	こめか雨 (hamim) と呼ばれた大洪水が発生し、死者多数。	TS: 110
721/ 1321	大飢饉により、多くの人びとが家畜が死亡。	TS: 115
725/ 1325	ズファールにて豪雨発生し、死者多数、家屋損壊多数。	TS: 117
758/ 1357	豪雨と寒波により、農作物の不作。	TS: 128
783/ 1380	大きな揺れがワーディー・アムド全域において生じた。	TS: 143
783/ 1380	疫病が発生し、数えられないほどの死者がでた。	TS: 143
784/ 1382	熱波が生じ、700人もの人びとが死亡した。	TS: 144
787/ 1385	シフルにて大雨・稲妻・落雷が生じた。	TS: 145
794/ 1392	豪雨・大洪水が発生し、14人が死亡し、多くの財産が失われた。	TS: 150
810/ 1407-8	豪雨により穀物価格が上昇。	TS: 157-8
811/ 1408-9	穀物価格の上昇。	TS: 158
823/ 1420	大飢饉が発生し、穀物・家畜価格の上昇。飢餓による死者多数。	TS: 166
853/ 1449	シバームやボールにて【疫病による】死亡が発生。	TS: 181
860/ 1456	全ての地域で豪雨発生。	TS: 187
866/ 1461-2	豪雨。	TS: 191
887/ 1482	洪水の発生により、死者がでる。	TS: 200
891/ 1486	ハド라마ウト全域で、豪雨と二つの大洪水が発生した。	TS: 203
894/ 1489	大洪水と虫害の発生。	TS: 207
909/ 1503-4	ハド라마ウトやその周辺地域で大雨。	TS: 221
913/ 1507-8	シフルで大風と大雨が発生し、三隻の船が沈没。	TS: 226-7
912/ 1506-7	ハド라마ウトとその海岸部で飢饉が発生し、食糧価格が高騰。	TS: 228-9
914/ 1508-9	豪雨。	TS: 231
914/ 1508-9	豪雨。	TS: 233
914/ 1508-9	ハド라마ウトにて時期はずれの落雷あり。	TS: 238
918/ 1512-3	豪雨。	TS: 252
918/ 1512-3	熱波が発生し、多くの人びとが死亡。	TS: 253
918/ 1512-3	熱波のせいでハド라마ウトの穀物が枯れる。	TS: 253
919/ 1513-4	飢饉が生じ、アラウィー家の人びとも死亡。	TS: 256
929/ 1523	シフルで大風と大雨。	TSH: 158
930/ 1524	大雨と大風。	TSH: 160
933/ 1526-7	イエメンでベスト大流行。	TSH: 183
938/ 1531-2	ハド라마ウト、シフルにて大寒波、穀物価格高騰。	TSH: 202
939/ 1532-3	ハド라마ウトで疫病が流行し、死者多数。	TSH: 213
943/ 1536-7	シフルで大風が発生し、船の損壊・沈没。	TSH: 238
945/ 1538-9	ハド라마ウトで飢饉発生。	TSH: 266
947/ 1540-1	食物価格の価格高騰。	TSH: 280
950/ 1543-4	シフルで食物価格が高騰し、魚以外に食物がなくなった。	TSH: 301
951/ 1544	シフルやアデンで食物価格が高騰。	TSH: 304
958/	ハド라마ウトで疥癬が大流行。	NS: 251
963/ 1556	シフルとその周辺で強風発生。	TSH: 352
968/ 1560-1	飢饉が発生し、多くの人びとが飢え死ぬ。	TSH: 363
970/ 1562-3	ハド라마ウトで大洪水が発生し、多くのナツメヤシが倒壊。	NS: 274
979/ 1571-2	シフルとその周辺域で大風・大雨が発生。	TSH: 404
981/ 1573-4	大風・雷の発生。	TSH: 408
998/ 1590	洪水の発生。	NS: 458

のリバート、そしてボール Būr にある家々の一部を破壊した。……（中略）……そうして、その後、イナゴの大群が到来して、その〔地域内の〕農作物を食べ、人びとには穀物の根が残されたのであった [TSH: 207]。

このような自然災害以外に、ハドラマウトは以下のような疫病にもたびたび襲われた。

939/ラビーア・アッサーニー月/1532年11月か、あるいはその前後の月に、ハドラマウトで疫病が発生して、多くの人びとが死亡した。そして、このようなことはハジャラインでも発生した。しかしながら、その疫病は女性や若者たちの間で生じたものであった。一方で成年の男性といえ、それはわずかであった。〔歴史家の〕バーサンジャラ Bā Sanjala は疫病がハドラマウトに広がり、その病によって多くの人びとが死亡し、……（中略）……シバームの町だけからでもおよそ400の棺が、そしてボールの町からは1,500もの棺が運び出されたが、それらの棺の多くは女性や小さい子供のものであったと言っている [TSH: 213]。

以上のような、ハドラマウトにおいて生じた自然災害・飢饉・疾病の事例は枚挙にいとまがなく、突発的に生じる予測できないこれらの災害や災難が、ハドラマウトの人びとをおおいに困窮させる最大の要因であったことは、想像に難くない。

こうした天災や災難にあえぐハドラマウトの人びとの状況を端的に描写した記述として、ハドラマウトの年代記『ヒジュラ暦10世紀の情報に関する旅人の光』の914/1508-9年の簡条には、つぎのようにみえる。

ハドラマウトの人びとは、生活することにおいて貧しい人びと (ahl ḍank) である。……（中略）……またタリームについていえば、……（中略）……すなわちそこは、かつて気候において最も均整のとれた神の地であり、土壌において最も健全な地であり、そして水において最も甘い地であった。さらにそこ〔の建設〕は古く、昔日にはとても多くの人びとが居住していたと言われている。しかしながら、今やタリームは極限まで弱々しい [町である] [NS: 76]。

『押韻の水場』をはじめとするハドラマウト関連の諸史料において、タリームは、イラクのバスラから移住してきた彼らの祖先が最終的に住み着いた都市であるために、畏敬の念をもって聖なる地として描写されている [GB: 77-101; MS, I: 29, 146-51]。また、上の記事の著者アイダルスィーは、インド在住のアイダルス家の子であり、タリームは彼の一族の出身地であり故郷でもあった。しかしながら、聖なる都市・故郷とみなされていたタリームやハドラマウトを述べた上記の史料は、そこに居住する人びとがきわめて貧しい生活環境に置かれていたという現実を明瞭に物語っているのである。

以上のことから、生産性の低い土地柄に加えて、自然災害や疫病に見舞われることの多かったハドラマウトの自然環境ゆえに、物質的・精神的により豊かな生活を提供してくれる新天地を目指して海外へ旅立つことは、航海の要衝に位置していたハドラマウトに居住する人びとにとって、実に自然な成り行きであったのだらうと推測されるのである。それゆえ、

ハドラマウトの人びとがインド洋海域の各地域への移動・移住活動にみえるさまざまな理由の奥底にはいつも、この生活上の貧窮から抜け出したいという切望が存在していたと考えるのである。

むすびにかえて

本稿では、16～17世紀におけるハドラマウトの人びとの移動・移住に関連して、(1) タリームを故郷とするアイダルス家の人びとが異郷に居住する肉親・親類を頼りにして移動・移住活動を実施し、インド洋海域世界へと展開していたこと、(2) 目的地としての異郷における生活の安定・保証に関する情報に基づいて、異郷の政治的有力者のもとへ移動・移住が行われていたことを検証し、(3) あわせてハドラマウトの人びとが活発に移動・移住していた根源的な理由は、ハドラマウトにおける生活の経済的な窮乏状況からの脱出にあるのではないかとする私見を述べた。

冒頭においてすでに述べたように、人の移動に関わる問題を考察する際には、さまざまな観点からの総合的な分析が不可欠であり、その意味で本稿での考察は、そのごく一部をおこなったに過ぎない。しかし、西ヨーロッパ勢力がインド洋海域においてその勢力を徐々に拡大しつつあったこの16～17世紀において、ハドラマウト出身の人びとによる活発な移動・移住活動が、イエメン、ヒジャーズ地方、東アフリカ地方、インド、東南アジアの各方面にむけて、広域的かつ重層的に展開していたことを確認することはできたと思われる。

ハドラマウト関連の地方史料が写本の形でハドラマウト各地の図書館に豊富に所蔵されていることはよく知られているところであり [Serjeant 1950]、今後は、これら諸史料の入手・読解をとおして、ハドラマウトの人びとの移動・移住に関わる諸問題の検討を継続してゆくと同時に、16～17世紀の紅海・インド洋西海域における多様な交流の諸相を考察してゆきたいと考えている。

参考文献

- FM: Ibn al-Dayba', *al-Fakhl al-Mazīd 'alā Bughyat al-Mustafīd fī Akhbār Madīnat Zabīd*, (ed) Chelhod, J., Ṣan'ā', 1983.
- GB: Muḥammad b. 'Alī Kharīd al-'Alawī, *Ghurar al-Bahā' al-Ḍawī fī Manāqīb al-Sādat Bani Baṣrī wa 'Aidīd wa 'Alawī*, n. p., 1405H.
- MA: al-Muḥibbī, *Khulāṣat al-Athar fī A'yān al-Qarn al-Ḥādī 'Ashar*, 4 vols., Cairo, n. d.
- MH: Ibn al-Khurdādhbeh, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik* (B. G. A. 6), (ed) M. J. de Goeje, Leiden, 1967.
- MS: Muḥammad b. Abī Bakr al-Shillī Bā 'Alawī, *al-Mashra' al-Rawī fī Manāqīb al-Sādat al-Kirām Āl Abī 'Alawī*, 2 vols., Cairo, 1901-2.

- NS : al-'Aydārūsī, *al-Nūr al-Sāfir 'an Akhbār al-Qarn 'Āshir*, Baghdad, 1934.
- QN : Abū Makhrama, *Qilādat al-Naḥr fī Waḡyāt A'yān al-Dahr*, MS. Leiden Library, no. Or. 2598.
- TA : Abū Makhrama, *Ta'riḡh Thagr 'Adan (Arabische Texte zur Kenntnis der Stadt Aden im Mittelalter)* (ed) Löfgren, O., 3 vols, Leiden, 1936, 1950.
- TH : Ibn al-Wazīr, *Ṭabaq al-Ḥalwā* (ed) Muḡammad b. 'Abd al-Raḡīm Jāzim, Ṣan'a', 1985.
- TS : Aḡmad b. 'Abd Allāh Shanbal, *Ta'riḡh Ḥaḡramawt al-Ma'rūf bi-Ta'riḡh Shanbal* (ed) 'Abd Allāh Muḡammad al-Ḥabashī, n.p. 1994.
- TSH : Muḡammad b. 'Umar al-Ṭayyib Bā faqīh, *Ta'riḡh al-Shiḡr wa Akhbār al-Qarn al-'Āshir*, (ed) 'Abd Allāh Muḡammad al-Ḥabashī, Beirut, 1999.
- TY : 'Umāra, *Ta'riḡh al-Yaman (al-Mufīd fī Akhbār Ṣan'a' wa Zabīd)*, (ed) Muḡammad b. 'Alī al-Akwa', Ṣan'a', 1985.
- YṢ : Yaḡyā b. al-Ḥusayn, *Yawmiyāt Ṣan'a' fī al-Qarn al-Ḥādī 'Ashar*, (ed) 'Abd Allāh b. Muḡammad al-Ḥabashī, Abu Dhabi, 1996.
- 新井和弘 (2000) ハドラマミー・ネットワーク 尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一(編)『海のアジア モンスーン文化圏』岩波書店, 237-64.
- Eaton, R. M., (1978) *Sufis Bijapur 1300-1700 Social Roles of Sufis in Medieval India* (1993 rep. ed), New Delhi.
- Freitag, C. & W. G. Clarence-Smith (1997) *Hadhrami Traders, Scholars and Statesmen in the Indian Ocean, 1750s-1960s*, Brill, Leiden.
- Hardy, P. 'ĀDIL-SHĀHS *EP* I, 199.
- Löfgren, O. 'AYDARŪS *EP* I, 781-2.
- サティーンシュ・チャンドラ (小名康之・長島弘訳) (1993)『中世インドの歴史』山川出版社.
- Serjeant, R. B. (1950) Materials for the South Arabian History *BSOAS* 13 (2, 3), 281-307, 581-601.
- Serjeant, R. B. (1957) The Saiyids of Ḥaḡramawt, *An Inaugural Lecture at the School of Oriental and African Studies*, 1956, 3-29.
- Serjeant, R. B. (1962) Ḥaram and ḡawṭah, the Sacred Enclave in Arabia, *Mélanges Taha Ḥusain, publiés par Abdurrahman Badawi*, 41-58.
- Serjeant, R. B. (1963) *The Portuguese off the South Arabian Coast* (1974 rep. ed), Beirut.
- Serjeant, R. B. (1985) The Yemeni Coast in 1005/ 1597: an anonymous note on the flyleaf of Ibn al-Mujāwir's *Tāriḡh al-Mustabṣir*, *Arabian Studies*, 7, 187-191.
- Seth, D. R. (1957) The Life and Times of Malik Ambar, *Islamic Culture*, XXXI, 142-55.
- Schuman, L. O. (1962) *Political History of the Yemen at the Beginning of the 16th Century*, Gröningen.
- Shyam, R. (1968) *Life and Times of Malik Ambar*, Delhi.

- 鈴木恒之（2001）オランダ東インド会社の覇権 池端雪浦・石井米雄・石澤良昭・加納啓良・後藤乾一・斎藤照子・桜井由躬雄・末廣昭・山本達郎（編）『岩波講座 東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』岩波書店，95-120.
- Van den Berg（1886）*Le Hadramout et les colonies arabes dans l'archipel indien*（1969 rep. ed.）, Batavia.
- 家島彦一（1991）『イスラム世界の成立と国際商業 国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店.
- 家島彦一（1993）南アラビア・ハドラマウトの人びとの移住・植民活動『海が創る文明 インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社，345-377.
- 家島彦一（1994a）人間動態と情報に関する総合的研究——問題提起——『イスラム圏における異文化接触のメカニズム 3 ——人間動態と情報——』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，3-10.
- 家島彦一（1994b）インド洋海域における港の成立とその形態をめぐって 川床睦夫（編）『歴史の中の港・港町 I ——その成立と形態をめぐって——』中近東文化センター，65-99.

（東洋大学文学部非常勤）